
白銀の燈火

クォーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の燈火

【Nコード】

N9472Z

【作者名】

クオーツ

【あらすじ】

この世界に存在する能力者達には、一つの共通点がある。それは、能力は一人一つしか持ち得ない、というもの。しかし、この法則にはたった一人だけ例外がいた。〈白銀の燈火〉神崎漣だけは、例外だったのだ。――――ちなみに、「白銀の燈火」は「はくぎんのもしび」と読みます。

プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、楽しんでいただけたら幸いですー

プロローグ

あれは不可抗力だった。ターゲットを昏倒させようとした時に偶然人が通りかかれば、それは当然一緒に昏倒させてしまうことになるだろう。

要するに、俺はわざわざ人がこないであろう場所でことを済ませようとしたのに、あんな所を通りかかった方が悪いのだ。

ということで、俺は今回もボスの説教など全く聞かず、適当に相槌を打っていた。

「おい。聞いてるのか？ おいつ！！」

「すみません、その通りですね。今回も俺が悪かったです」

「話が噛み合っていないんだよ！ お前話聞いてないだろ！！」

同じ部屋の中にいる何人かの同僚達は、またか、というような視線をこちらに向けながら、それぞれ思い思いに寛いでいる。

そういった人達に羨望の視線を向けて、俺はまた目の前のむさいおっさんに意識を戻した。

めんどくさい。

そんな俺の心情が顔に出てしまったのだろうか。ボスの顔がみるみる赤くなっていき、次の俺の一言でとうとう爆発した。

「あー、もう戻っていいですか。俺、昨日は夜を徹して働いたから眠いんです」

「……………お前という奴は……………！ もういいっ！！ 漣、今日限りをもってお前はクビだ！！！」

とうとう言われたか……………。まあ、いつかこの言葉を言われる日が来るだろうと思っただけはいた。

ボスの叱責を冷めた思いで聞いていた俺は、特に躊躇うこともなく、用意していた台詞を口にする。

「……………分かりました。それじゃあ、今までありがとうございました」

「は？ お、おい漣！？」

という訳で、今俺はクビになった。しかし、この仕事は元から勧誘を受けて就いたものだったので、俺自身が特にやりたかった訳ではないのだ。クビにされたのならば、さっさと出て行こう。

俺は、住居がわりに利用していたオフィスの俺用スペースに置いてあるわずかな荷物だけを素早く鞆に押し込み、この場所を後にすることに。

さて、どこに行こうか。

「おいっ！ 漣、どこに行くんだ！！！」

またボスが何か怒鳴っている。いや、俺はもうここをクビになっ

た訳なので、あの人をボスと呼ぶ必要もないのか。

こちらに向かって声を張り上げるボス、もとい元ボスに目をやりそんなことを考える。

そして、元ボスの話を無視した俺は、オフィスの窓へと近づいていき窓から外を眺めた。そこにあるのは高所恐怖症の人が見れば足が竦むであろう光景。

それに全く恐怖心を抱くこともなく窓を開け放った俺は、室内に吹き込む風をその身に受けながら口を開いた。

「あー、長い間お世話になりました。じゃあ」

「ちょっと待てと言ってるだろ！！　おい！！」

俺は、まだなにかごちゃごちゃ言っている元ボスを放っておいて、窓から外に飛び出した。

さあ、明日から飯を食う金を何とかしなければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472z/>

白銀の燈火

2011年12月29日17時53分発行